●「SHINWA WALK～伝説そぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 37

37th Letter

夜寒の里伝説

伝説そぞろ歩き

名月や
匂宮(におうのみや)の
北きぬた
夜寒の里は
いま盛りなり

旗屋小学校前に名所石碑
尾張名所図絵にも登場

熱田区夜寒(よさむ)町にある旗屋小学校前に「尾張名所夜寒里」の石碑が建っています。これは、歌人・磯部芦丸が自宅門前に建てたもので、校舎拡張のために立退きとなりましたが、石碑のみを残して保存されたものです。

「夜寒の里」は、尾張の歌枕の一つで、短歌の世界でも名所となっていますが、本来は大高か鳴海付近のことを指していました。現に、大高城址の東に「夜寒」という地名がありました。それが、いつの間にか熱田が「夜寒の里」として台頭することになったのです。

夜寒町の辺りは、明治の末頃まで狐塚、蛇塚、上人塚などの塚が点在していて、広大な畑地でしたが、閑静でかつ眺望がいいことから、別荘地帯となり、さらに明治42年(1909年)4月に旗屋小学校が開校されたのを転機に住宅地帯に変貌しました。

延宝6年(1678年)に編纂された熱田最古の地誌『厚覧草(あつみくさ)』や元禄12年(1699年)に編纂された熱田町旧記には「夜寒の里は大宮の北、高蔵の南と言い伝えられている」と記されています。旗屋の東、高蔵の森の南一帯を指すようで、今も地名として残っています。

かつて夜寒の里は、閑静な月の名所だったようで、江戸時代末期から明治初期にかけて刊行された尾張の地誌『尾張名所図絵』にも月夜にむしろを広げて砧(きぬた)を打つ様子が絵に描かれています。晩秋の月夜に夜寒の里で砧を打つ音を聞くのが風流とされていたようです。

なお、夜寒の地名を取った「夜寒焼」は、辻鉦二郎が明治12年(1879年)頃、現在の中区金山二丁目に窯を築き、もっぱら茶器類を焼成したといわれています。

▲旗屋小学校前に建っている「尾張名所夜寒里」の石碑。

黄金のリンゴの実がなる楽園
ヘラクレスの難業にも登場

ギリシャ神話で名所といえば、ヘスペリデスの園が有名です。ここにはヘスペリデスと呼ばれていた三人の美しいニンフが住んでいて、夕暮れに太陽が沈む場所のすぐ近くにあることから「夕暮れの楽園」とも呼ばれていました。彼女たちは神々を不死にする飲み物・ネクタルの湧き出る泉の周りで、歌い踊りながら、黄金のリンゴの実がなる木を守っていました。

ヘスペリデスの園は、ヘラクレスの難業の11番目にも登場します。ヘラクレスがミュケナイの王・エウリュステウスから言いつけられたその難業とは、「黄金のリンゴの実を取ってくること」でした。

しかし、この楽園は神だけが行ける名所で、行き方も人間は決して知ることができない定めになっていたため、ヘラクレスはさまざまな冒険をしながら世界中を旅して回ったにもかかわらず、ヘスペリデスの園へ行くことはどうしてもできません。

困り果てたヘラクレスは、世界の果てで天を支えている怪力の神・アトラスの元へ向かいます。力には自信のあったヘラクレスは、自分がしばらく代わりに天を支えているので、その間にヘスペリデスの園に行って黄金のリンゴの実を取ってきてくれるよう頼んだのです。

最初アトラスは、いくら人間の英雄だからといっても、できるわけがないといって断りましたが、試しに肩代わりさせてみてびっくり。ヘラクレスは天をぴくりとも動かさずに支えてしまったのです。すっかり感心したアトラスは、早速出かけていって黄金のリンゴの実を三つ持ってきてくれ、ヘラクレスはそれを持ち帰ってエウリュステウスに渡し、難行を達成したのでした。

人間はヘスペリデスの園には行けませんが、夜寒の里には行けます。現地に足を運んで、往時の名勝に思いを馳せてみたいものです。

※次回は金山神社に伝わる鍛冶伝説について特集します。
お楽しみに。

■ 写真／Kiyoshi K　■ イラスト／Rei　■ 取材・文／Icarus